

『続・新アラビア夜話 : ダイナマイター』
の空間表象

NAKAWA, Ayako / 中和, 彩子

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal for Research in Languages and Cultures / 言語と文化

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2021-01-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023752>

『続・新アラビア夜話——ダイナマイター』 の空間表象

中 和 彩 子

序

Robert Louis Stevenson と Fanny Van de Grift Stevenson の共作による長編小説 *More New Arabian Nights: The Dynamiter* (1885) は、ルイス単独作の短編集 *New Arabian Nights* (1882) —— 正確にはそのうちの、ボヘミアの王子 Florizel を主人公とする連作短編 “Suicide Club” と “Rajah’s Diamond” (初出は雑誌 *London*, 1878) —— の続編として刊行された。

『新アラビア夜話』と『ダイナマイター』の冒険が繰り広げられるロンドンの都市空間については、先行研究の中で言及されたり論じられたりしている。しかし前者はシャーロック・ホームズ物語などと類縁性の高い都会の冒険ロマンス、後者は時事的なテロリズム文学・「ダイナマイター小説」⁽¹⁾ という、それぞれ限定的な枠組みで読まれることが多い。その上、後者が共作であることも手伝って、この正・続の二作品は並べて論じられることがない。唯一の例外とってよいのが、モダニズムの先駆けという観点からスティーヴンソンの小説作品を読み解いた Alan Sandison である。サンディソンが、『ダイナマイター』の登場人物で、自宅よりもホテル暮らしを好むノマド気質の Mrs. Luxmore を「現代都市の落ち着かない市民そのもの」と評し、このような存在が「スティーヴンソンの『アラビアン・ナイト』の都会の情景」を、モダニスト作家たちの描き出す現代都市に通底させていると述べる時 (112-113)、サンディソンは『ダイナマイター』のみならず『新アラビア夜話』をも指している。

しかし、両者はほぼ同時代のロンドンを主な舞台とした冒険を描いてはいても、都市空間の扱いには大きな違いがあるように思われる。『新アラビア夜話』では冒険が徹底的に街路と結びつけられているのに対し、『ダイナマイター』

においては、家も冒険の舞台となるのだ。

本稿では、『ダイナマイター』の空間表象の特質を、『新アラビア夜話』を参照しつつ明らかにしたい。

1. 『新アラビア夜話』——街路の冒険

『新アラビア夜話』の連作短編「自殺クラブ」「ラージャのダイヤモンド」は、紳士たちによる都会の街路の冒険物語である。

「自殺クラブ」冒頭の人物紹介は、全編通じての主人公フロリゼル王子の活躍を、都会（ロンドン）の遊歩者の冒険として位置づける。フロリゼルは「生まれによって定められた人生よりももっと冒険的（adventurous）で一風変わった生き方」に興味を抱いており、ロンドン在住中、腹心の Colonel Geraldine を供に、変装して「夜の遊歩（an evening ramble）」に出かけるのだった（3）。「これらの冒険（adventures）」は当局には秘密にされ、二人は「幾多の危険（a score of dangerous passes）」を乗り越えながら互いへの信頼を深めていく（4）。

「自殺クラブ」「ラージャのダイヤモンド」の各挿話においては都会の街路と危険がさまざまに結びつけられており、街路の冒険者はフロリゼル一人ではない。各挿話の主役は、遊歩者として、あるいは悪事に利用され、謎めいた依頼を受け、街路を徒歩や馬車で動き回り、好んでもしくは不運にも危険に遭遇する。例えば「自殺クラブ」第三話“The Adventure of the Hansom Cabs”の、イギリスに帰国したばかりの Lieutenant Brackenbury Rich は、「地方の学校から士官学校へ進み、そこから直接東の帝国 [インド] に赴いた」ため、「大都市ロンドンは目新しかった。だから、この探検のための世界（this world for exploration）でさまざまな楽しみを味わえるものと期待していた」（53）。シャーロック・ホームズの相棒ワトソンを思わせるこの植民地帰りの軍人にとり、ロンドンほまさに、Joseph McLaughlin がホームズ物語等における帝都の表象に読み取った、「ジャングルとしての都会（the urban jungle）」そのものである。

ブラクンベリーは人のにぎわう街路を歩きながら、「刺激的な都市の空気の中で、四百万人の私生活の謎に囲まれて、永遠に歩き続けられそうな気がした」（53）。彼が立ち並ぶ家々に目をやり、「あの温かな光のともる窓の後ろで

何が起きているのだろうと不思議に思」う一節は (53), 遊歩者の街路と、家庭生活の空間の断絶を強調する。通りかかった二輪馬車の馭者の合図を受け、乗り込んで行き先を任せると、迷路のような街路をぐるぐると駆け抜けて一軒の屋敷の前に止まる。馭者は、「夜会服を来た連れのない紳士たち」をさらってくることになっているが「こういう冒険をお好みではない方々」は帰ってよいのだと説明し、ブラックンベリーは即座に中に入る (55)。それは、危険な極秘任務を頼める勇敢な紳士を緊急に選り抜くため、ジェラルディーン大佐が用意した会場だった。迷路のようなロンドンの街路は、冒険へとつながっているのだ。

2. 『ダイナマイター』——家の冒険

『ダイナマイター』の物語は、ソーホーの Godall (フロリゼルの別名) の煙草屋 (cigar divan) で、三人の青年紳士たち (Paul Somerset, Edward Chaloner, Harry Desborough) が偶然再会するところから始まる。三人揃って仕事も金もないという窮状を打開しようと、サマセットはある男 (テロリストの Zero) に懸けられた賞金を目当てに各々探偵をしようと提案する。

サマセットは、探偵こそ紳士にふさわしい唯一の専門職 (profession) だと主張し、チャロナーが、紳士である自分には冒険など無縁だと言うと、次のように反論する。

世界は冒険に満ちあふれていて、冒険は街路をゆく君に押し寄せる。窓からは手が振られ、ベテン師たちは近寄ってきて、外国でお会いしましたよねと言い、あらゆる種類と身分の、愛想のよいいいかがわしい連中が、君の関心を引こうと媚びへつらう。(28; "Prologue of the Cigar Divan")

サマセットの頭の中で、紳士と探偵と都会の遊歩者は一つの存在に重ね合わされているのである。あとの二人も冒険の開始に消極的ながら合意する。

サマセットの「街路の冒険」のイメージは、「自殺クラブ」のブラックンベリーが抱くそれと似ているが、「窓」に関しては違いがある。ブラックンベリーの窓は温かな光を街路に投げかけるが、その裏側は遊歩者には決して見えない。一方、サマセットの窓からは、街路の遊歩者に向かって、助けを求めて

なのか、手が振られている。このイメージの違いは、『新アラビア夜話』と『ダイナマイター』の根本的な違いを象徴しているように思われる。『ダイナマイター』においては危険は街路ばかりでなく家でも発生し、それがときに街路に波及し、また、探偵行為や冒険は家の中でも行われるのである。

* * *

テロリストのゼロは、ロンドンの街路で使用する時限爆弾を居住空間の中で製造、保管しなければならない危険について熱弁する中で、「地雷が埋まり、脅威にさらされ、そして要するに文字通り倒れんばかりの、このような家」と呼ぶ(195)。『ダイナマイター』における家の危険は、何よりダイナマイトによってもたらされている。三人の冒険者たちにダイナマイトの危険がどのように経験されているか見てみよう。

チャロナーは、ロンドン郊外の下宿に徒歩で朝帰りする途上、ロンドン南部の迷路のような住宅街を通り抜けながら、「これこそが[サマセットの言う]冒険を見つけられる舞台だろう」と考える(31; “Challoner’s Adventure: The Squire of Dames”)

一軒のロッキング・ハウス(貧困者層向けの宿泊所)⁽²⁾の前で「近隣の平和の象徴のような」ひとり遊びをする猫を見て立ち止まっていると、家の内部で爆発音、続いて蒸気の音がし、「同時に、扉や窓の隙間という隙間から、悪臭のする蒸気が噴き出した。猫は一声叫ぶと姿を消した」。そして「扉が勢いよく開き、もうもうたる煙を吐き出」すとともに、男二人と淑女一人が「街路(the street)に転がり出て」逃げ去る(32)。

音と煙はすぐに消え、チャロナーはしばらくして我に返ると恐怖に襲われ、闇雲に駆け出して、一足先に逃げていた若い上品な女性と遭遇する。これがチャロナーの街路の冒険の端緒となる。

実は、時限装置の失敗で予定より三十時間も早くダイナマイト爆弾が爆発したのだった。家の中の危険と恐怖が、家の開口部を通じ、遊ぶ猫に象徴される平和な街路にもたらされる。

ただし、チャロナー自身が経験するのは、他の二人の冒険者と異なり、『新アラビア夜話』の人物たちと同じように最初から最後まで街路の冒険である。彼はその間、サマセットの冒険宣言を何度も思い返す。

「チャロナーの冒険のヒロイン(the heroine of his adventure)」は(34)、実はテロリストの Clara Luxmore で、相手が御しやすい紳士と見てとると強

引に連れ回したあげく、うまく騙してグラスゴーに潜伏する仲間の男 (McGuire) に手紙と大金を届けさせる。グラスゴーの街の、「ロンドンの街路にいるときと同じように」、「都市の砂漠の感じ」を覚える場所に建つ家で (102)、チャロナーは任務を果たすと同時に真相に気づかされる。警官隊から逃走した際にマグワイアの仲間から与えられたひどい服装を恥じて、チャロナーは一晩中グラスゴーの街路を歩き回り、遅い始発列車を待って「街の、人目に触れない裏通り」をぶらつく (114)。一等車にも乗る気になれず惨めに帰宅し、損失ばかりの冒険を苦々しく振り返る。

ダイナマイト爆発の際に街路にいたチャロナーに対し、ハリーとサマセットは家の中で危険にさらされる。

ハリーの住むブルームズベリーの下宿に、ある日、魅力的なキューバの女性 (実はクレアラ) が引っ越してきて、ハリーは一目惚れする。波乱万丈の大冒険の末イギリスに逃れてきたが、キューバから持ち出した宝石を狙われ身を潜めているという彼女を心配し、ハリーは街路の探偵に転じる。彼女の外出時、尾行によって護衛しようと考えたのである (290)。しかし一日目は気づかれて体よく追ひ払われ、二日目は非難されたため、ハリーは、家が面しているスクエアや彼女と共有するテラスをぶらつきながら何となく彼女の姿を求めるしかなくなる。ハリーの冒険は街路から遠ざけられ、家とその周辺に限定されてしまう。

ハリーはもう一度だけ尾行を、彼女を頻繁に訪ねる「求婚者」(実はマグワイア) に対して行う。正体がばれたと勘違いしたマグワイアは逃げ出し、尾行は失敗に終わる。しかしともかく怪しい男だと確信したハリーは、忠告するために「思い切って／冒険的試みとして、初めてキューバの麗人の部屋の扉をノックした (ventured for the first time to knock at the fair Cuban's door)」(294; "The Brown Box (Concluded)")。街路の冒険に失敗して家の冒険に転じるというパターンが、ここにささやかな形で繰り返されている。ハリーはこのとき、宝石類を入れた茶色の箱 (実は時限爆弾) をホリヘッドの港まで極秘裏に運ぶという任務を引き受けるとともに、唐突な愛の告白をする。

翌朝、ハリーが命じられたとおりの街路の冒険に乗り出す一方で——ただし、「目を楽しませるものはほとんどなく、若者の注意は、無口なドライブの連れ [である茶色い箱] に集中していた」(299)——クレアラは自分がハリーを愛していることに気づき、危険な任務を取り消すために必死に行動する。駅に着い

たハリーから箱を取り戻して一人で家に急ごうとするが、ハリーは心配して一緒に馬車に乗り込んでしまう。ハリーにとって街路から家の冒険への三度目の逆戻りである。

箱を彼女の部屋に戻して居座るハリーをクレアラは追い払おうとし、とうとう真実をすべて打ち明け、「この死の家 (this house of death)」から逃れてほしいと必死に懇願する (303)。隣接する小児病院が危ないと気づいてハリーが焦り始めたとき、箱がかちりと音を立て、鈍い衝撃音が部屋中に鳴り響き、二人は抱き合っただけで床に倒れ込むと爆発を覚悟する。ついでシューシューという耳障りな音、ひどい悪臭がして、「部屋には息が詰まるような濃い煙が充満した」(305)。しかしやがて煙は晴れ始め、二人は爆発が失敗に終わったことに気づく。

ハリーの「死の家」の冒険が爆弾の不発で終わるのに対し、サマセットはより深刻で劇的な形で家の中のダイナマイトの危険を経験する。

サマセットは、自らの冒険論を実践するように街路を歩き回っていたところ、謎の四輪箱馬車の女性 (ミス・ラクスマア) に拾われ、高級住宅街の豪邸 (挿話タイトルの《余分の館》) に連れていかれて夕食を振る舞われる (“Somerset’s Adventure: The Superfluous Mansion”)。「自殺クラブ」のブラックンベリーと似通った冒険の始まりである。型破りな夫人はさらに、翌日からエヴィアンに出かけるのでサマセットに留守を預けると独り決める。

約束したとおり、無人となった館を再び訪れたサマセットは、あたかも遊歩の場を家の中に移したかのように「階から階へ、ぶらぶらと (wandered from floor to floor)」 (165; “The Superfluous Mansion (Continued)”), 広大な家の数々の部屋を見て回ったあと、すぐ荷物を持ち込み、自ら宣言した街路の冒険のことなど忘れたかのように腰を落ち着けてしまう。

ミス・ラクスマアが許可していったので、サマセットは下宿人をとることにする。募集に応じて、謎の病人 (実はゼロ) が入居する。雑多な人々を昼夜となく出入りさせる、得体のしれないこの男が仮病を使っていると気づいたとき、サマセットは再び「探偵熱 (the detective fever)」に燃える (179)。留守の部屋をこっそり探索してゼロの正体を悟るが、帰って来た本人に見とがめられる。ゼロがサマセットを鷹揚に許して友人のように扱ったため、紳士であるサマセットは密告できない立場に追い込まれる。

翌日から、サマセットは、なりゆきで犯罪者と親しくなってしまったことへ

の嫌悪感や「この家に蓄えられているいまいましい原料」の存在——「火薬庫も、この《余分の館》に比べれば安全な喫煙室のように思えた」——に苦しめられ(217)、家から逃げ続ける。バーをはしごし、街路を徘徊し、早朝帰宅するが鍵を取り出したところで中に入る勇気を失い、「安らぎを求めて、コーヒーショップというひどい避難所(shelter)へと逃げた」(218)。手持ちの金がなくなって帰らざるを得なくなると「玄関ホールに忍び込み、抜き足差し足で金のしまつてある戸柵に向かった」(218)。その金で、何日間かゼロから離れてみるつもりだったが、運悪く見つかって食事と会話を長時間強いられた末に「部屋から、そして家から、逃げ出した」(224)。それでも警察には行けないまま「日中はずっと公園をさまよい歩き……、夜はずっと街をパトロールした」(225)。サマセットにとっては、家こそが危険と恐怖の場所となり、街路の彷徨ではなく帰宅のほうが冒険となるのである。

夜明けによくやく対決の覚悟を決めて帰宅すると、ゼロは最新の爆破の失敗の報告をクレアラから受けて自暴自棄になっており、どうせ無害だからと部屋のダイナマイトの時限装置を三十分後に設定しておいたり、ダイナマイトの塊を床に投げつけようとしたりする。サマセットは改めて恐慌をきたしながら、「この非運の家(this doomed house)」,そして「もう君を引きとめておける仕事のなくなったこの都市」をすぐに立ち去るよう説得し(309; “The Superfluous Mansion (Concluded)”),ゼロをつかんでひきずるようにして外に走り出て間もなく、大爆発が起こる。《余分の館》は炎と煙を吐き出し崩壊し、館の建つスクエアじゅうが大騒ぎになる。

以上のように、街路で爆発に遭遇するチャロナーに対し、ハリーとサマセットは「死の家」,「非運の家」の屋内でダイナマイトの危険に遭遇する。ここで、チャロナーに与えられた運命が、結末に関してもほかの二人と対照的であることに注目しておきたい。

チャロナーは、小説のエピローグで煙草屋に再登場し、店員となっているサマセットに「探偵業」の首尾を尋ねられると、「やらなかった」と「ぶっくらぼうに」答える(322)。サマセットが、へまをして金も体面も失ったと自ら告白し、あとから来店したハリーが、尾行の試みには失敗したが妻(クレアラ)を得たと報告する率直さとは対照的である。さらにチャロナーは、クレアラがぬけぬけと初対面のように振る舞うのに何とか調子を合わせたあと、口実をつけて一人姿を消す。

三人のうち、「自殺クラブ」「ラージャのダイヤモンド」と同じ街路の冒険を行ったチャロナーだけが、その冒険自体をなかったことにしたうえ、退場してしまう。『ダイナマイター』の冒険の空間にとって、チャロナーは異質すぎるものが示されているかのようである。

* * *

以上のように、『ダイナマイター』の家が内包する危険は、物理的には、街路で爆発させるためのダイナマイトとその使い手たちがもたらす。その危険のイデオロギー的な側面について、Deaglán Ó Donghaile (2011) は Sharon Marcus による都市の住宅の文化史を参照しつつ論じている。それによれば、チャロナーの冒険の発端となる、爆弾製造工房が隠されたロッキング・ハウスは、「通常の、短期滞在の〔極貧の〕人々に加えて、アイルランドの破壊活動分子を内包することで、二重に危険な (insecure) 空間」となるが、「この最下層のスラム居住者たちの社会的、政治的多様性は、中産階級的、帝國的なドメスティックな空間の理想と矛盾する」(33)。そして、帝都ロンドンの屋内空間とそれが象徴する階級や帝国の境界の破壊 (subversion) に対するステイヴンソンの関心は、ゼロが下宿したことによる《余分の館》の変容にも同じく表れている (34)。

オドニーアレが言及していない、爆発自体は失敗に終わったハリーの下宿についても同じことが言えるだろう。一軒の家だった建物を分割して間貸ししているらしい下宿屋に、クレアラ(彼女自身は一貫して淑女として扱われる)が入居し、紳士ではないマグワイアら、そして爆弾を引き込んでいる。

一方、オドニーアレには欠けているジェンダーの観点から 1880 年代、90 年代のダイナマイト小説・戯曲を分析する Elizabeth Carolyn Miller は、次のように述べる。

ダイナマイト・ナラティヴの基底を成しているのは概して、「プライベートな」市民が、時と場所が悪ければ、自身は何の責任を感じていない「政治的な」問題のために犠牲になるという恐怖である。個人と集団、私と公、個と政治が不愉快にも分かちがたく結びついていることをテロリズムが露わにする、というのがこのジャンルの基調である。(7)

そして、政治との関係が元来希薄な存在であることによって、「[ステイヴン

ソンらのダイナマイト・ナラティヴに登場する] 女性政治犯たちは、現代テロリズムに埋め込まれた、新しくも不愉快な、公／私が相互に関連しているとい感覚を表現している」(189)。

ダイナマイト小説の文脈で『ダイナマイター』を論じるオドニーアレ、ミラーは、要するに、テロリスト、テロリズムが、帝都ロンドンの空間の既存の境界を揺るがし、家という空間を危険にさらしたとしている。

しかし、彼らの議論の文脈からは抜け落ちているミセス・ラクスモアの存在と、彼女の《余分の館》との関係に着目すれば、テロリストが侵入する以前にすでに、「中産階級的、帝国的なドメスティックな空間の理想」が、それに伴うジェンダーの理想もろとも破綻していることに気づく。

3. もう一つの「家の冒険」

ミセス・ラクスモアがサマセットを相手に物語る半生記“Narrative of the Spirited Old Lady”の後半は、《余分の館》で起きたフロリゼル暗殺未遂事件にあてられている。それによれば、夫が亡くなり、一人娘のクレアラが家出したあと、ミセス・ラクスモアは自宅はフロリゼル王子に貸し、「自分好みの生活 (the life that I have always preferred)」であるホテル暮らしをしていた(141)。ある日たまたま、自邸に使われている形跡がないことに気づき見張っていると、王子の家来たちが訪れて料理や飲み物等を運び込み、ダイニングルームに風を通してから去る。夜になるとフロリゼルが帰宅し、次いで一人の青年(実は暗殺者)が訪れて会食が始まるが、そのあともう一人の若者(共犯)が家に侵入する。よからぬ企みを察知し、ミセス・ラクスモアは同じ勝手口から忍び込むと、犯罪者の逃走経路を断つべく扉を閉めて施錠する。さらに、侵入者が待機している食器室も施錠してしまう。会食の部屋を覗きに行くと、暗殺者が決行時刻を前に変心し、王子を逃がそうと必死になっていたが、王子が悠然として動かないので絶望して毒薬をあおる。飛び出したミセス・ラクスモアの介抱で青年が意識を取り戻したところで決行時刻が来て、「鋭い爆発音 (a sharp detonation)」が家じゅうに響き渡る(153)。ともに勇敢で好奇心旺盛な王子と彼女が食器室を見に行くと、男が拳銃で自殺していた。

ミセス・ラクスモア自身が語る、この第三の(時系列的には第一の)「家の冒険」の物語は、どこまで事実なのかは不明ながら、彼女の家・家庭との関係

を浮かび上がらせる。端的に言って、彼女の自邸への強い思い入れには、過去の家庭生活への紋切り型の感傷と、所有財産の価値への執着が相半ばしている。

無人で寂れた自邸を見たミセス・ラクスマアは、「家というものは、ヨットと同じように、現役の状態を保っておくべきだと考えていた」ので憤りを覚えるが、「同時に、[家の] 眺めは[彼女]の空想を自然と過去へと呼び戻し」、彼女は「幸福とも悲しみともつかず、両方の鋭く胸を刺す感じを併せ持った、心地よい状態」に浸る(141-142)。ふだんは使われていない家に一夜の来客の準備がなされるのを見ると、「淑女ぶるつもりはないが、道徳については確固たる見方を持っている」彼女は、「夫が私にもたらししてくれた私の家が、小さな別宅 (*a petite maison*) のように使われるのなら」訴訟を起こさねばと思う。そして「月光に輝く私の懐かしの家 (*my old home*) の正面玄関」を「過去に優しく思いをめぐらしながら」どんな客が来るのか見張る(143)。その後の彼女の機転のきいた勇気ある介入のおかげで暗殺が未遂に終わったあと、恩返しを申し出たフロリゼルに対し、ミセス・ラクスマアは「危険は、貴人を包囲しているものです。私は、自分が保有する住宅 (*my tenement*) にその危険を共有させたくない」からと、賃貸契約の解除を願う(161)。

ここに示されている自邸への執着は、彼女が気まぐれに正反対の言動をとるため、額面通りには受け取りがたい。彼女は初対面のサマセットに、旅行に出るとなると「この家は重荷 (*this incubus of a house*) 」だからと留守番を命じ、尻込みする彼に、「火薬で家を吹き飛ばしたって気にしない」し、「やりたいことをやればいい——部屋を賃貸するもよし、民宿を営むもよし」と言う(163-164)。実際に家が爆破されたあと、ミセス・ラクスマアは「私の所有財産の家 (*my house-property*) に何をしてくれたの? 」とサマセットに向かって金切り声を上げるが、次の瞬間には「この一件は高くついたけれど、めざましく滑稽だ」と経緯を知りたがる(333; “Epilogue of the Cigar Divan”)。

過去の家庭生活を刻み込んだ家への愛着についても、当の家庭について彼女が軽く振り返る際の、二十年近く「ほぼ完璧に平穏な生活 (*a life of almost perfect quiet*) 」を送り、一人娘の「母としては、非の打ちどころがなかった (*as a mother I was above reproach*) 」, といったおごりな言及(138, 139)と、単なる紋切り型になっている点では大差ない。実際、彼女はフロリゼルから自邸を取り戻したあとも生活習慣をほとんど変えない。

私はノマダ的な女性 (a woman of the nomadic sort) で、[七軒ある家作をめぐる] 裁判を抱えていないときには、大陸の鉱泉保養地に滞在するのを習慣にしています。病気になったことはないけれど、もう若くはないし、いつだって人込みの中にいるのは楽しいから (I am always happy in a crowd)。 (163; “The Superfluous Mansion (Continued)”)

サマセットが数時間前に会食したばかりの家を再び訪れたとき、住人が跡形もなく消えているのはもちろんのこと、外は暖かいのに「家にはいわば、仮死の冷氣 (a chill, as it were, of suspended animation) が宿っている」し、「埃と影が目に残まる」(165)。ミス・ラクスマアはまるで、フロリゼル王子の一夜限りの会食を、サマセットを相手に反復したかのようだ。王子から家を取り戻しながらも、国際的なノマド、あるいは「群衆の人」として生きる彼女は、そこにドメスティックな空間を取り戻してはいない。ミス・ラクスマアの家に関する言動はことごとく、彼女が中産階級的な家庭の理想とはほど遠い女性であることを示すのだ。

サマセットはサマセットで、「同じスクエアの上品な住人たち (genteel inhabitants)」やその召使いたちの響響を買うようなボヘミアンな生活を送り始め (167)、芸術家気取りでダイニングルームの一部をアトリエにする。ところが、予告を忘れて不意に帰宅したミス・ラクスマアは、その散らかりようにショックを受け、「あなたは外見は紳士だけれど……きっと八百屋の店員なんでしょう」と言い放ち、即刻の退居を命じる (180)。その彼女の機嫌を即座に直させるのが、下宿人募集のためにサマセットが描いた二点のポスターであるのは興味深い。

サマセットは、「下宿人が[この] 歓喜の館の内側で (within the walls of that palace of delight) 送ることが期待できる生活」を絵にしようと思いついたとき、二つの対照的なイメージの間で迷う。

一方で、家庭生活の謹直な喜び (the sober pleasures of domestic life) を描くことは可能だ。夕べの炉火に、金髪頭のわんぱく坊主たちに、シューシュー音を立てるコーヒー沸かし器。しかし他方で、……もう少し幅の広さをもった暮らし (an existence somewhat wider in its range) の、大胆に言えばムハンマドの楽園 (the paradise of the Mohammedan) の、魅

力を謳うこともできる。(170; “The Superfluous Mansion (Continued)”)

結局両方描いて毎日交替に貼り出したが、嘲笑されたり意味が分からないと戸惑われたりして、間貸しの宣伝の目的を果たせない(171-172)。

サマセットの不決断により、イギリス人が重んじる中産階級の家庭的な生活と、イスラーム教徒が信じる享乐的な来世の楽園⁽³⁾とは、交換可能なものとして提示され、前者の価値が相対化される。あるいは、中産階級のドメスティックな空間も一種の信仰の中にしか存在しないことが暴露されているとも読める。そして、ミセス・ラクスモアが二枚の絵を同時に見、かつ内容を理解して面白がったらしい唯一の人物なのは、彼女が家庭に関してサマセットと価値観を共有していることを暗示する。

ミセス・ラクスモアが暗殺者たちの行動を追いながら「家の所有者なのに、住居侵入犯のように家の内側に立ち入っている (burglariously present in its walls)」のを面白く感じたと回想し(147)、預かった鍵を使って初めて家に入るサマセットが「特権を与えられた強盗 (a privileged burglar)」に譬えられているのも(165)、二人の中産階級的な家庭空間との距離と、家庭空間の破壊における共犯関係を象徴しているのかもしれない。

結 び

ここまで、冒険者の街路と家との関わりを通じて、『ダイナマイター』の空間のありようを明らかにしてきた。『ダイナマイター』では、家が街路と同等あるいはそれ以上に危険な空間として表象されているが、ダイナマイトによって初めて危険なものに変容するのではない。家はすでに不安定な空間になっており、ダイナマイトの爆発はその事後的な象徴とすらいえる。

そう考えると、小説の結末で、クレアラが突然改心するとともに仲間たち(ゼロ、マグワイア)も自滅したために「ラディカルな革命家からブルジョワの妻にすんなりと移行する」(Miller 219) ことについても、ミラーとは別の解釈が可能になる。ミラーは、クレアラが嘘とアイデンティティの順応に長けた人物であることに注意を喚起しつつも、小説のエピローグは「ブルジョワの家庭的心性を伝える、まじめで過剰に因習的な言語」で語られ、小説の大部分で起こっているジェンダーの転覆に歯止めをかけていると見る (Miller 218-

220)。しかし、Coventry Patmore を引き合いに出し、母子を中心に据えたフロリゼルの家庭礼賛と、クレアラの転身とによって、唐突に回復されたかのように見える家庭空間は、逆に言えば、元テロリストの女性すら容易に受け入れるような曖昧な空間になっているのだ。

『ダイナマイター』は、家を街路と選ぶところない冒険の空間として提示し、公／私の境界が変容する 19 世紀末の都市空間を的確にとらえた作品だといえるだろう。

* 本稿は、法政大学国内研究（2020 年度）の成果である。

《注》

- (1) ヴィクトリア朝後期（1880 年代、90 年代）に登場した「ダイナマイト小説」と『ダイナマイター』については、Melchiori, Miller, Ó Donghaile (2011, 2018) を参照。
- (2) 19 世紀ロンドンの“lodging house”については、Marcus 104-107 を参照。
- (3) イスラームの来世の楽園については、塩尻 9-11 を参照。

参考文献

- McLaughlin, Joseph. *Writing the Urban Jungle: Reading Empire in London from Doyle to Eliot*, UP of Virginia, 2000.
- Marcus, Sharon. *Apartment Stories: City and Home in Nineteenth-Century Paris and London*, U of California P, 1999.
- Melchiori, Barbara Arnett. *Terrorism in the Late Victorian Novel*. 1985. Routledge, 2016, pp. 59-83.
- Miller, Elizabeth Carolyn. *Framed: The New Woman Criminal in British Culture at the Fin de Siècle*, U of Michigan P and U of Michigan Library, 2008.
- Ó Donghaile, Deaglán. *Blasted Literature: Victorian Political Fiction and the Shock of Modernism*. Edinburgh UP, 2011.
- Ó Donghaile, Deaglán. “Parliament is Burning: Dynamite, Terrorism, and the English Novel.” *Terrorism and Literature*, edited by Peter C. Herman, Cambridge UP, 2018, pp. 212-229.
- Sandison, Alan. *Robert Louis Stevenson and the Appearance of Modernism*, Macmillan, 1996.
- Stevenson, Robert Louis. *The Dynamiter: Written in collaboration with Mrs. Stevenson. Works of Robert Louis Stevenson*, vol. 7, New York, Charles Scribner's Sons, 1922, AMS P, 1974, pp. 1-333.
- Stevenson, Robert Louis. “The Suicide Club,” “The Rajah's Diamond.” *The Complete Stories of Robert Louis Stevenson: Strange Case of Dr. Jekyll and Mr.*

Hyde and Nineteen Other Tales, edited by Barry Menikoff, Modern Library, 2002, pp. 3-136.

塩尻和子 『イスラームの人間観・世界観——宗教思想の深淵へ』 筑波大学出版会, 2008.

(イギリス文学／国際文化学部教授)